

【実践事例（7）】

（気仙沼市立大谷小学校）

地域住民や自治体防災部局と連携して津波襲来時の学校外の避難場所を検討

学校の状況

- 東日本大震災では、津波が校舎1階まで浸水した。
- 学校のある大谷地区の沿岸地域では、津波の被害が大きかった。
- 学校は海岸から約500mの位置で、標高約16.7mある。学校までの津波は想定されていないが、今後想定される宮城県沖地震（連動型）では、最速14分で、岩井崎や大島に到達すると考えられており、大谷海岸には5m以上の津波が想定されている。

取組方法

- 1 幼・小・中学校及び、地域の自主防災組織等の関係機関が参加した、大谷地区防災連絡協議会が毎年開催され、津波襲来時における学校や地域住民の避難方法が検討されている。
- 2 大谷小学校は、第2避難場所として学校からさらに約30m高い避難場所への避難を検討している。その避難場所までは750mあり、15～20分程度移動にかかるため、岩井崎までの津波到達予想時間が10分以上ある場合の避難場所とし、津波到達予想時間が10分未満であれば、校舎屋上へ避難することとしている。
- 3 隣接する大谷中学校も、同様の対応をとっており、地区住民も、同じ避難場所に避難できることを会議で確認している。
- 4 小学校では、中学校や地域住民と合同で津波を想定した避難訓練を実施しており、避難対応を検証した。
- 5 避難を想定しているルートが混み合った場合の代替ルートも設定し、次年度に検証予定である。

検討している代替ルート

